

SHOW HEYシネマルーム



Data

監督: チョン・ユンス
出演: キム・ミンソン/キム・ナム
ギル/キム・ヨンホ/チュ・
ジャヒョン/ハン・ミヨン
/パク・チイル

👁️👁️ みどころ

宮廷画家は男に限定！朝鮮王朝のあの時代は、そりゃ当然。しかし、「劉備玄德が女であった！」という仮説が成立するのなら、韓国人なら誰でも知っているシン・ユンボクだって・・・。

女を捨てて、一心不乱に画の勉強を。それが順調に進めばいいが、男に心を燃やすことになれば、宮廷画家と恋する女の二股かけは？美しいベッドシーンを目に焼きつけながら、4人の男女の確執を眺め、あの時代の「不条理」をあぶりだすのも面白いのでは？

劉備玄德は女であった！するとシン・ユンボクも？

スーパー歌舞伎『新・三国志』第1作のテーマにはビックリした。それは何と、「劉備玄德は女であった」という大胆な仮説だったから。韓国にも歴史上有名な画家はたくさんいるはずだが、私が知っているのは『酔画仙』(02年)で観た朝鮮時代の宮廷画家チャン・スンオプ(雅号:吾園(オウォン))のみ(『シネマルーム7』202頁参照)。本作によって、朝鮮時代、宮廷画官署の画員として最も有名な絵師の1人であったシン・ユンボクの名前をはじめ知ったが、彼の残した名画は教科書にも登場するなど、韓国では知らぬ者はいないらしい。ところが奇妙なことに、彼の師匠のキム・ホンドの記録はたくさんあるが、1758年生まれシン・ユンボクは公式記録にほとんど記述がないらしい。

そこで考えられたアイデアが、「シン・ユンボクは女だった」という大胆な仮説。その仮説をもとに書かれた歴史ミステリー『風の絵師』(イ・ジョンミョン著・早川書房刊)が火付け役となって、シン・ユンボクブームが到来したため、韓国では2008年に本作が公

開かれ観客動員数230万人のヒットとなったらしい。

男装の麗人はカッコ良さが命だが・・・

劉備玄徳は女であったとしてもそれを知るのは関羽だけだし、劉備玄徳は大将だからその素性が部下たちにバレる可能性は少ない。しかし、シン・ユンボクは多くの画員たちと共に宮廷凶画署の画員として共同生活をしているのだから、いくら男の格好をしていても、それを隠し通すのは難しいのでは？

そんなつまらないことを考えてしまったが、それ以上に少し失望したのは、男の格好をしたキム・ミンソンがあまりカッコよくないこと。やはり、『ペリバラ』のオスカルにしても、『李香蘭』のスパイ川島芳子にしても、「男装の麗人」はカッコ良くなかつちゃ・・・。

正祖は絵画に何を求めるの？

『王の男』(05年)の燕山君は暴君だったが、それでもチャンセンとコンギルの下ネタをふんだんに使った笑える庶民芸を気に入っていたから意外に庶民派(『シネマルーム12』312頁参照)?それに対して、本作の正祖(ハン・ミョング)は政治に気を配りながら、芸術(絵画)を愛し、庶民に美しい絵を理解させることによって政治にもそれを活かそうと考えている名君。そしてまた、同時に高尚な宮廷画だけではなく、庶民の生活を描いた風俗画にも興味を示したから、こちらも庶民派?そう思ったが、ある日を境にシン・ユンボク(キム・ミンソン)が描きはじめたちょっとエッチな風俗画については、頭の固い古手の画家たちと同じようにこれを受け入れず、拒否反応を示したからやはり保守派?

他方、あの時代に一世を風靡し、正祖から最も愛されていたのがシン・ユンボクの師匠キム・ホンド(キム・ヨンホ)だが、シン・ユンボクとキム・ホンドの間で交わされる「絵画論」を聞いていると、師匠の絵画論はイマイチしっくりこない。庶民の性文化を赤裸々に描いたシン・ユンボクの風俗画は、真の人間の美しさを求めた結果だったが、そんな実践はあの時代にはやはり早かったのかも?本作は男と女の愛憎劇としてはよくできているが、絵画に対する価値観についての議論が徹底していないところが、ちょっと不満?

話題のベッドシーンは?

2008年は、『霜花店(サンファジウム) 運命、その愛』(08年)のソン・ジヒョ、『湯き』(09年)のキム・オクピンと共に、本作のキム・ミンソンの「露出度」が韓国でも注目を浴びたらしいが、さて、キム・ミンソンの露出度とその美しさは?それはあなた自身の目で確かめるのが1番だろうが、ベッドシーンに目の肥えた(?)私でも、本作のそれはかなりグッド。私の評価ではベッドシーンNO.1は『ラスト・コーション』(07年)の梁朝偉(トニー・レオン)と湯唯(タン・ウェイ)の絡みだが、本作のベッドシーンの美しさはベスト10には入りそう。もっともそれは、キム・ミンソンの男の姿がイマ

イチであったため、よけいに女になった時の美しさが目立ったのかも・・・。

三角関係プラス の男女の確執は？

キム・ホンドの弟であるガンム（キム・ナムギル）がシン・ユンボクと出会ったのは、ある偶然から。しかし、庶民の生活を観察して楽しい風俗画を描くべく、シン・ユンボクがガンムの案内でスケッチ旅行（？）をしていた際、ひょんなことでシン・ユンボクが女であることがバレてしまったから、さあ大変。とは言っても、別にガンムがこれをネタに脅迫してきたわけではなく、大変なこととはこれを機会に2人が惹かれ合い、遂には男女の関係を重ねるようになったこと。師匠のキム・ホンドがいつからシン・ユンボクが女であることを知ったのが本作の1つのポイントだが、弟のガンムとシン・ユンボクとの美しいベッドシーンをじっと覗き見た時の、キム・ホンドの心境とは？

その結果、シン・ユンボクをめぐって兄弟の争奪戦が起き、三角関係がややこしくなったというだけならよくある話だが、本作にはそこにキム・ホンドの馴染みの妓生ソルファ（チュ・ジャヒョン）が絡んでくるから、ややこしい。さらに、この男女4人の恋の確執には厳然としたそれぞれの立場、地位が絡んでくるから、さらにややこしい。中でも一番タチが悪いのは密告。一見ヨリを戻すかに見えたキム・ホンドとソルファの仲が、結局キム・ホンドのシン・ユンボクに対する想いの裏返しであることに気がついたソルファの密告とは？本作が描く男女4人の恋の確執はいかにも韓流ドラマらしくドロドロしているから、そういうのが好きな方には本作は特にお勧め！

これは秩序の乱れ？これも絵のせい？

庶民の性風俗への楽しみはいつの世も共通だが、そこにエッチ小説や淫らな絵が果たす役割が大きいことは、エロ小説を書くことに執念を燃やし続けたマルキ・ド・サドを描いた『クイルズ』（2000年）を観れば明らかだ。それを性風俗の乱れ、社会風俗の乱れを言うかどうかは、為政者の判断次第？しかして、映画後半は某お寺で開催された怪しげな集会上、ガンムとシン・ユンボクが参加していたことがポイントとなる。そのお寺への一斉捜索によって集会参加者が一網打尽にされたわけだが、その副次的効果として宮廷凶画署の画員であるシン・ユンボクが女であり、キム・ホンドの弟のガンムとそこで密会していたことが明らかになったわけだ。こうなれば、女であることを知ってシン・ユンボクを正祖に仕えさせていた父親のシン・ハンピョン（パク・チイル）や、師匠のキム・ホンドの責任も免れることができないのは当然。さあ、そこで下される正祖の裁断とは？

映画はその後、さらに一波乱、二波乱を見せるが、こんな事態を性風俗の乱れ、秩序の乱れと見るかどうかが第1の論点、そして、それがシン・ユンボクの風俗画のせいと見るかどうか第2の論点だ。さあ、そんな論点についてのあなたの見解は？

2010（平成22）年8月5日記